

保育・教育の価値とリスク 感染症流行と、変わる社会のもとで

未就学児施設は個性を育てる場所。にもかかわらず、「白か黒か」やマニュアル的な考え方も強い。今月はそんな例をいくつか。安全や健康においては柔軟性と共に、価値とリスク、責任を考える力が不可欠です。

「ケガはどの程度で受診（救急搬送）すればいいですか？」

頭部と腹部のケガは（外から何も見えなくても）命を奪うリスクが高いですから、心配な時や見ていなかった時は受診、または救急搬送をお伝えしてきました。^{*1}並木由美江先生（保育保健、救急）と一緒にリモート研修をし始めて、「どの程度のケガで受診？」「搬送？」「心肺蘇生？」という疑問が多いことに気づきました。並木先生の答えが秀逸です。

安全・健康に必要なのは、 考えて判断する、おとなの力

4

掛札逸美

KAKEFUDA Itsumi

心理学博士

保育の安全研究・教育センター

心理学博士（健康／社会心理学。専門は安全とコミュニケーションの心理学）。1964年生まれ。筑波大学卒。健康診断団体広報室に10年以上勤務後、2003年、コロラド州立大学大学院に留学、2008年、博士号取得。産業技術総合研究所特別研究員を経て、2013年、NPO 法人保育の安全研究・教育センター設立（2020年に任意団体化）。厚生労働省「平成27年度 教育・保育施設等の事故防止のためのガイドライン等に関する調査研究事業検討委員会」委員の他、死亡事故の検証委員等も務める。

「どうしよう？と迷ったら、迷わず受診。迷わず救急搬送。迷わず心肺蘇生。」

受診、搬送、心肺蘇生、どれも「して失敗！」はありませんが、命のうえでも責任のうえでも「しなくて大変なことに！」はあります。医者から「こんなことで受診するな」と言われる？ そういう時はニッコリと、「私たちは人様のお子さんをお預りしている立場ですから、先生に『大丈夫』と言っていただくのが大事なんです」。受診・搬送は、医師に判断の責任を担ってもらうため。受診・搬送せずに命にかかわったら園の責任です。

ケガに限らず、熱中症等も同じです。体調や安全にはつきりした線引きはないのですから、「これは私たちが抱えられる責任の範囲を超えている」という柔軟な判断を。

「この遊具は何歳から安全に使えますか？」

「ターザンロープは何歳から使えますか？」

「ロープ状のものをしっかりと手で握る、またがつて足でしがみつく、体を揺らす、そういった動きを赤ちゃんの時から『高さ』のない環境でしていますか？」「そういう環境や遊具はありません」「そういった力、体の動かし方が育っていない子どもをターザンロープに乗せて『しっかりとしがみついて』と言ったんじゃ、落ちて当然。何歳ならとは言えません」

ターザンロープに限らず、すべての活動に言えることです。成長発達は基礎になる力やスキルからだんだんと積み上げていくもので、「飛び級」はできません。小手先の器用さでうまくできているように見える子もいるかもしれませんが、必ずどこかに無理が出るか、ケガなどをするか、です。

「○○ちゃんはこの活動をできる」、それは単純な月齢ではありません。子どもが積み上げてきたものであり、一人ひとりの積み上げを見極めてるのが皆さんだと思います。

「体温37.5度を越えたら、
お迎えを依頼？」

新型コロナウイルス感染症（以下、「コロナ」と略す）流行によって、これまで以上に感染症

や健康関連の質問をいただくことが増えました。

昔の仕事（健診団体勤務）の知識も引っ張り出してお答えしていますが、実によく聞かれるのが「保護者に伝える基準」です。

「体温が○○度以上なら登園自粛ですよ（受診ですよ）」「自治体はそう言っていますか？」「いいえ」「そうですか。国も言っていない。熱だけで決めないで、体調がいつもと違うと思ったら、いつもと違うと親御さんに伝えてください。どうするかという判断は保護者。子どもの健康は保護者の責任です。園の判断で『自粛して』『受診して』と言ったら、責任は園になります」^{*2}

前回は述べましたが、鍵は「いつもの○○ちゃんと違わないか？」です。おとなでも平熱の高い人、低い人がいます。園が体温だけで切ったら、「うちの子は平熱が高いだけに、不公平だ」と感じ始める保護者もいるでしょう。逆に、平熱が低い子は異常を見逃すかもしれません。すべての異常で熱が出るわけでもなく、熱が出たら全員が同じようにぐったりするわけでもないのです。

園が保護者の行動を決めようとするれば、マニュアルが必要になります。でも、子どもの健康について決めるのは保護者。診断するのは医師であり、検査するかどうかを決めるのも医師です。園は「いつもと違う」を伝えるところが責任だと考えるべきでしょう。

おまけ「すべてリモート配信になっていくのでしょうか？」

コロナ拡大を防ぐため、園外で先生たちが集まる研修会はリモートであってもお断りしてきました。すると、「研修会は全部、オンラインですべきと（掛札は）考えている？」と聞かれることもあります。いいえ。ただ、安全がテーマの場合には、集合研修後の伝達研修が難しいため、園から複数の先生たちが受講できるリモートのほうが圧倒的によいと思います。あくまでも私の分野の話です。

「リモートか集合か」という二分法ではありません。リモートは「置き換え」ではなく、「プラス」です。以前のように運動会をする時が来ても、リモート配信を併用すれば遠方にいる親戚が観覧できる。園に集まる保護者会を年2〜3回するならば、合間に月1時間でもリモート保護者会を開けば、保護者も気楽に参加できる。保育参観はリモートのほうが子どもの「いつもの姿」を見られる。園見学でもリモートを併用したほうが、入園児や職員を集めるうえでは得策。「どっち？」ではなく、「今までの方法にプラス」なのです。

*1 「保育の安全」(検索)サイト↓「安全のトピックス」

↓6-1

*2 同「コミュニケーションのトピックス」↓B-4